オクソン倶楽部

1992年　秋季号

生きるよろこび

昭和四十八年十一月十四日、いまから十九年前に出家得度した。ある日比叡山で写経し全国からたくさんの方がたと一泊したときのことだ。

ある人がしみじみと語るには、お嫁にきて二十年目、五十歳代になりやっと庭の柿の実を自分で取って食べられる身分になった、そういわれるのだ。この人のご主人の妹さん、小姑にあたるのだが、近所へ嫁いだ。ところがしょっちゅう実家に帰ってきては姑さんと私のことをあれやこれやと陰口を言ってるみたい、という。庭に柿の木があり、柿の実がどれだけなろうと、嫁の私の自由にならず、姑は柿の実を取っては娘の嫁家へ運び、私はひとつも食べさせてもらえなかった。それどころか、むかしは、お嫁さんは外へ出られなかった、出させてもらえなかった。

いまはどうか。

お嫁さんたちはどんどん外へ出られるし、好きなことをしている。世の中は変わったし、子供たちにお嫁さんが来ると、いまのお嫁さんらよりもっと自由にひどくなる可能性がある。

どこの家にも、ひとつやふたつの「苦」があるだろう。初孫がうまれ、可愛い女の赤ちゃんとおばあちゃんが次男の嫁を見舞ってみても、長男の嫁がなかなか決まらない、という「苦」もあるのだ。この世は「苦の世界」だから、初めから生まれてこなければよいではないか、わたしは頼んで生まれてきたわけではない、というかも知れない。生まれる場所も、時も、両親も選んで生まれてこれない。何かで生かされているのだから素直に有難いと思われねばならぬ。生きている値打ちがある

四苦のうえ、老いること、病気になること、そして死への苦しみはわかるが、なぜ生まれることが苦しみか、との疑問をもつだろう。これはお母さんのお腹の中で十カ月いて、狭い産道からうぶ声をあげるまでの苦しみをいう。生まれてしまうとこの苦しみを忘れてしまう。わたくしたちは生まれた瞬間から老いと死に向かっている。だから死をかかえて生まれてきたのだし生きる喜びをもっている。わたしはいま六十九歳（平成三年）むかし流にいえば「古希」だ。数え齢七十だが、おばあさんになった、と思ったことは全然ない。おばあさん、といわれても、わたしのこととは思わぬ。戸籍の年齢など忘れ、若いのだ、若いのだと自分に言いきかせている。

飛行機の搭乗券に男、女、年齢を書くようになっているがどうして名前だけにしないのか。

先年、山形へ行っての帰りに航空券を買おうとしたら「おとしはいくつですか」ときかれた。「五十です」と答えたところ見送りにきていた人が、「先生、わたしが五十なのに、先生はもっと上ではないのですか」と横からいう。本人が五十だと自分に言いきかせて若返っているのに、いらんことをいわないでよ、といいたくなりムッとした。坊さんはウソ偽りを言ってはいけないが、これ位のウソなら許されるのでしょう。

自分が齢をとった、と思えばトシをとる。戸籍の年齢は五十だ、と思えば五十になるのだから、いまは精神年齢を優先に考えましょう。心は三十五歳だ、と思えばその人は若いし若く見える。生き生きと生きることが「若い」のである。

人間の体、入れものが老いるのは避けられぬとしても、心は老いなくてすむ。明日への生きる喜びを持てば心に老いは訪れまい。

寂庵を訪れてくれるみなさんから顔のツヤがイキイキとして若い、といわれるが、これには秘密がある。毎朝、年齢の3倍、掌で顔を叩く。顔の色がよくなり血行もよく若返る。一度、試して見てはどうだろうか。（談）

講話を要約させてもらいました。

瀬戸内寂聴・プロフィール

徳島市の神仏具商の次女として大正11年5月15日に生まれた。

徳島高女から東京女子大国語専攻部に入り昭和18年卒業。31年度の新潮社同人雑誌賞、35年田村俊子賞、38年女流文学賞など数多く受賞された。48年中尊寺で得度、法名は寂聴。54年大律師に昇格し62年岩手県浄法寺に招かれ天台寺の住職となる。